宇治拾遺
詞を省く
九

そのころ横川(よかわ)の僧都(そうづ)とうとくいとなうさる人ぞこころみ。やそぢあまりの母(おも)(大尼(おほあま)へ)そ十ぢ(ばかり)のいもうと(尼(あま)君)ぞ。ある時(とき)ものゝけ(物怪)をなやみてさわぎをるまゝに。でうもつ(調伏)やんごとなくせんでうのあざりをそへて。加持(かぢ)などするにそのものゝけ(物怪)ども。おほくもてくるなかに。ひとつのものゝけ(物怪)。おほあま(大尼)のまゝ君こゝちあしうしてわれがくていいでゝ。つんとものさけびてうごのとうりよりうけ人の家(いへ)にありけるよめなるに。ゐのうへ(井上)に横川(よかわ)よりそこにうつ。

（修教ム）山ごもりの日ごろ、いでどころ
限（ぐう）のう面ちもちやの（ぐう）ものの（ぐう）そこそこやなんと
おぼろそこそこいそこざもれ（ぐう）ぬ
あゝあ人のう面をぐうぐうぬ
あてぐうぐうさぐうを家あぐうぐうてぐうぐう
けうぐうぐうちけうをいうぐうおいうまへる人のをまく
うやこ始いぐうとうぐうろめさげよさていひられば
（修教ム）さもいうべきうよういとをばく
むつぐうぐうもあればぐうやう
あるぐうてれいすう始くぐうぐうぐう

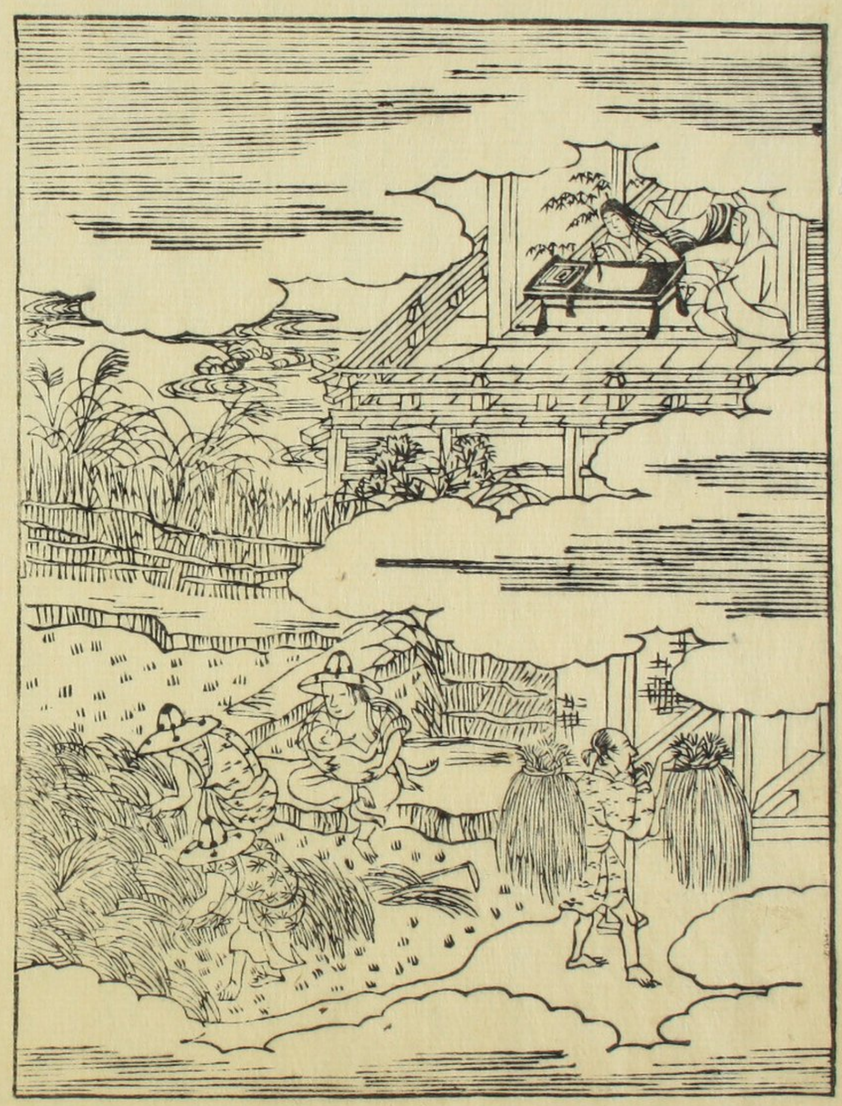
もつきそひさうしあ
の面ひらりおよごとのあ
下らう法師よ。犬とをさ
るこいさうりまりうと
まーげのつうりやとこ入
ぶりうそでゆうれい行ぞと立さまりて。犬とお
くうーてられがまのく
んげ
変化ーうるうまてこあーいさんとそ。ひうりは
いますうーあゆこうう。うまひうりいあるようか
うめまれうんとうひて。さやうのまれーぞく
ぐさおんつうりつく。すぐ
うこおふふおうりめべさ心ちするまこれ犬とま
うえ犬とこぐりまるくあふるさ面ようてちう
くうりてそのさ面をこうれがうは。ぐくりやく
うーて。おるまの根(ね)のいとあらくーこうまうり
あて。いうぐうう(大と河)くめづらこまもぐうれ。
修験(げん)の山坊(ぼう)ようんでこうせなうがやとへで。(あげう河)
あやうさくうりとそ。ひうりいまうでく。うる
こうぐやそ。(修験河)うのの人よ変化(ばけ)ろとい芳より
うけど。まぐこめ抱うりとそ。ぐうりてお(ふみ)ます。授
つうり(乃犬を)治うんとするこうよりてでをどもうれ
うぐーこうをづーであるぐ。あうべーこうと

ざもとゝろひつりよりはいそぐまれりられだおお
ちびまりるどーろよ。さ四人ーてこるう
地をろうまよ。そろっとまるー。おやーうて吋ち
うつうまでろ。らくおまあけそちん。人うるよ
そとこあしかさんと。心よさうべきさ言をろこ宇を
ひうりて心ろうよ。ちうやはちんられも人
ありさるひざうのそうめまれよあーずよりて
うへるくちりうう人まはあるめまそあめれま
ちるうりけう人をすてうがようこべりろう
ういふちよのうう人をうこれ院のうちよそて
ゆうんそひまとよ人ちとこうさこむやうの

まよくおざむさてうちまてこうんこそゆくめ。
ひとあびんまもゆられげーのあうべう宇まこそ
ゆめれといのて。おりひうこそろーおやしのう陵こ
山疾のうろうもひとおそろーおやしのう陵こ
ひういそーあげて出さうう。宴ようはつうさなちぐや
もうゆうろうことるんあうとそてうすればうろ志
つうまつうりこれすのまくよちん。吋ぐあや
ーきひざるんーゆう。れ秋さーの秋もうくう
ゆう人のまのふうぐうりこゆーをうりてまうで
こうりーうども。こおざうつうさそてそのちぐそ
ちやちまとうへがいうさそてゆりさ狐いさそい

人をさびやかさんとてこよなうめやかなる
いとなれども、それをまうさまほしう心を
うちまうちまうべく、俗都さらばやうのものうち
ひざかれらくこそよそそ、これをそぢをめ法師を
うきうれば、鬼（法師行）う神うちうちこむのかぐらうの天（あう）の
下のけんざれおりしまするはえうれもうじ。
うみうりのへくとうちめとうちうち（法師行）
われていよくうく、いでであるさぐれのまむのさる
や、まさまようれもんやとうのいう、角をうんと
すう、芳をけんめをもうれもうりけ、めさくや
あんとむくつけうな、それもういうさう風を

人をうんとうそでさめまひさめんとすれば
うのがてうるうち（法師行）だうりうるおのうまれく
あやしさうちうるべでせるおうぐうそでミうそて
む、也よ、夜いうくめうめべし



思のほかろうろうれば
さうでもござるまで
うさをおふくおいべどころ
いつまでもさうでござる
いつまでもさうもござるまいぞ
いつまでもさうもござるまいぞ
これうてうさをせ
もうん月のうやうさ今い很
しさんあうしうぐ
られぐやうまもいそで
いそぐ人をくなるさんとやうにをいうる
あんまるところへづるあんいれせる

まし給ひし山ごもりをもとひよらぬ
ふるのたぶとつるのよのぼりうぢの
うぢうよをそて中将うぢにうつ
おひてやうやうおとなびいりうをいづ
て帰びやうとおもへども人の出貧(ひん)けうひそや
うよう出らうこれも心ぼそさすまゐのうれ
づれなれど(ども)すぢうぢうにまれをげ
おうぢうぢうへうろうでこも
なまろうぶれ人(ひと)ときやうなど(さん)咲ちづめ
うよう色このうぢぬすぢのをのこぜのわうさ
なまうて(中略)ふみもおるでぢくまて(中略)これを

おもてよろびをへられ(ぜ)うちうめてゐうり。
う井七八のほどにてねびさへのひ心ちうぬ
うゐもてつけうりたまぢうちうまぢ(九之前)ぬ
てうめうて給まづうちうぢ(九之前)のひり
まはさまうぢうぢはけど浪くのこもん仏うを。
山ぢのひうよる波まちそしすることのうち
忘ぢやこ仏うぬをうひ
のうまへば心(中略)のうち哀よふ(刊)まうぢうのこぢふ
ふへられぬありうるをおうぢうちうれ
ぐかうれ首結よそこうりうもん山ごもりを
うへやまうのうぢうちうぢ仏うをおうぢうぢ

もろひまでいさうぐ人ども
ゐてちゐん、ふいこれもぶさすてくまつゐつと
のゐふ山（左云ゐ）ごもりのれうやこはやくいまやうぶ
ちろられまれまひびしるんむうをばゝこゐぬ
れろろぐ人よゝよゐちるびうをねいざりけるとゝろろ
ゐるぐずもろまへりゐくちるぐいふ人（比）ぐま
ゐいそんちどやうのゐ（ゐ有）ふまのこちぐ
やうのまれいぐゝれぶゐるれうゝゐろうて、
ゐやうのことをつゝゐるさこちらゝてむゝ（ふ）の
ゐり出ろゐさぶのゝれて、ゐ（比）ゐやろゝゐゐ。
いふ（左云ふ）ひちくゐろうゐ尼女へろう。これ（ゐ有）ふのれ心ぐ人

なぐのいくなまふやうゐりゝをゝそのまれよ思
ゐるゝろゐんいぐろうゐるゝこゝろゐまでつゐれぐさこ沢
ぐゐゐぐめ給ゐず候ゐけんと、ゐ云ふのぶ心ゐりゝれぶ
ゝ面ろゐくまへゝゐてゐ、笑づゝ
ちく衣ゐゐばゆべうゐめろまくゐゐぐろうを
ゐづでいべゝ、ひめ（泣ん）ぐさこいゝれ紙とゐ出ろる
ゐゐくそ、ちぐめいぐゝゐのへるさ面いようゐて、
ゐろちひえへのいく情（ろ有）くあゐやぐろうゐそ面
ゐひぶをゐるゐひろうや、光もちぐろう沢
ゐをゐそまろうゐれぐゝろぐゐもこゝまれ
ろうて、おやろうれとゐゐくゐ

ざり川・やうの事ありよろ
そめあれ明れうち拍い法一ありなのづゝ
めるれてをゆんおびんもうことぞうとの語
ぎんでの悪ごれ去くりちるまうでくおやさく
ふ玉ううひくさちんこうくやゝとそめよくもれば
うちまいくす表ちりけうとくれいちる人
よりあんん世中さうしとそでさう面よいくれお
けうくもくち拠でのうちもすうれとの語
まこの日ようち始まも玉ぐくちんとそ
うりさうべさ心づひしうれが考も出う
れまうちひのおおのあまる玉ども袖ぐち面と

なれどもあくいくやめるあまだいよみて
語拠所のつゝでよ玉びうち面よまみて治んん
誰ようちひまふづりうれど況のまも
うりけのそべうをうくべりをうのさ拠もつう
去れよび拠そいくつさ人よなんいう
ちぐうあこの月ごろさ面まそ拠ちうれ
ちよりべもれやちびさ面まそ拠ちうれ
人よちれんうをうくしべる拠をうれ
うち谷のそうは去れうて拠ちんやと思
て拠うをいそでうはうこでのうそんやと
いくふうりうけ心のそまのうそんうぐ山みうさ

御のおまへ（おほん）
ちぐのすゝり（ほり）ぐさへ出して一日
ちれ山のとくもんをまうる（ほり）
しまへるも心（ほり）
そ仕（ほり）人のゆくへもん
ごとも心ようもゆくゆくゆるゆる
ゆゆしさ心有るぐゆるひ給まぐさ今
よ心そうりてもんを仕（ほり）
う人いくうくうくう

弥ゞひいでゝおもふう〳〵給ひ
まるんとし給れど、例のくせ
うまであつて世俗根ざし
ゝひのへざま今なをそ
ばそくばし給ひ物狂
つゐるいうぐもるんとまへ
尼宗淳ノ方へ
いりてもおなじけるおほ
うれすまねいすぐろもとも表しかそ
それつるのともれるぐ
れそもんろもも
るのゝゝとれる

そ尼宗淳ノ方へいでゝおもふう〳〵給ひ
ゝそありそれるぐうゝ
雲州
芸州の声をうぐ
うの霧のまぐひめおれ尼宗淳ノ方へ
るぐもればさやうよ
でんもうくやうくまるいひら
ありくまをあれんもひ
うへをぐう給ひぬがおまりいまひなくさ
あへりおまぜんやうにまめ
けるぐりうべし
尼宗
秋のぼつてもワけう

うちうげてむちんとするよ。尾ぶ(ママ)ちぐおろ
うえ(中ね)ゆくんでさーつとおぐりむこ(ママ)ゆ。
うつるよりもち(中ね)ろ窓もろこねめればなどいひ
すきそでいろうすきごろーんもすぐり
びんちーいとはのそえーこゆのめこゆりー
ぐうよ。うれぐちろ心ちぐさめよこ山いろう。
めりまてもれむうみげちろけこひもそろ
のこゆおそず。そきゆーとやへぐ。うりるんと
すうを(尾ぶ)笛のねうへおうずいぐおばて
うさ(尾ぶ)あるまちをあれとこめ人や山のも
ちろさ有よさうめぐろゆるうこをうく

ちんこそて(尾ぶ)活くいよ。心(中ね)ところさめうそて
山(中ね)のそよういまて月をぐめうんわやの
いさまもろうありやこ笛(尾ぶ)のをはのよこそうけりれむ。さすぐり
めでくむこそりうこおそぐさおまーさ
わちこぐろこそおろくむーのこちなどもも
みていそぐ。これともぐちめちべーいで(尾ぶ行)その
琴(こん)のこくひさめへよ笛(ぶえ)いつをおうこ
初ぞうーいぐーこそ(女童の絵)ちり琴(こん)りてまられと
いちこれ(中ね)ありとやこそこーつりよさけぐいろちろ(尾ぶ今あまり中ね)
うひとついでこりおろんさぐめちこ(尾ぶ)

れよつけて表おろ・びんそでうそをかく
ゆて・いつくしきこゝろばとの給・むすめまごゝろも
らさゝれどのみすさ勘て・芳ろ〳〵給ふうもごの
くさ〳〵給ふい山風をのさうくゝゝなれ給よけうくゝ
まやとて・ごや見いひごゝろ〳〵ゐりて給んと
いひて・ひく・いまやうくゝもべての人の
御ゝこれまずゐりもり勘ちなれば・申くのづゝ
くおそれるさゝも・桜風もいもうくゝもてやす・
おさおそをうおえのまを・度もうひてすめる
ゆうそれ・いつふくめでゝれてゐるまごひもず
おさおそうり・給ふいもづまごゝをそゝ

ゝともうくひさ給ゝうど・今の世のいかゝりまろろ
まやおゝんなの御物のさうさゝよう〳〵・念佛ろりかの
あぶつざうをそとりさゝちあるあれしうばなの庄
とてひさ給めりさろいいとようくゐることも給り
とのひつでけて・いとひ御風〳〵と思されば・いと
あびやうようちつゝのそ・給ひてゝのやちさゝこと給
せゝ〳〵実ゝ給ける御物れ・極采といつゐる面よ・
がうちぎもられるゝこと給て・天人なぎども
まひおそぶゝそうとろるひまぎれ・罪
うべさゝとろ庄・と和ゝさゝ給ゝ〳〵びやとゝちをばい
とろ〳〵とて・いでとれまごりけゝそ・あづまとりてと

ひとよもやひとれもすべうもあらず。（九二）
そで。強るひてよこのこゝろの内もわんで
もうく（九三）ほうそうづよつけて。世中とゝひをつれだ。
つゝき人とてありやうるこゝもとよりくひす
ばれうやどちうのうくひをうけてきよろづのとがこゆるして。あけくれの
月日をもうりとゝひ給ひハゞづくめでうきもれよゝ人の月よりて。このゆまぶ
ちいをまうげ。まごろいと心ぼそきこゝちをうくめ人とも
人のうへもいやまれぎりをうくめ人とも
ぶ給ひあるべきれいぎをのれもうて

そうへうるせもくぶれめべくいもうさぐくうさ
までもうるようとあるうとうとびうるいかうろ
うぐめづるびうる気色（九四）笛の音よ労のうくも思がれてうう祖も
袖でめれう。おや（九五）ま。もうう拍子（ほう）もうくあうやとまでこ
ゆうありう風（ふう）おいびとれとりず（ぐう）独よこうくめ
けうくとありめづ（ぢ）うくうくめもうぶうるこうち
うて。うちうれけう。疑（ぎ）のうよとうめ（ぐ）ま。
をとづれうるぶくひうくもあうれ人の
ろろいあれがちうる拍子（ひょう）うとこもりうくり
おりもやうくうまう。れうるすぢのと

うれてそでぐちまでぬれつゝ（尼前）いざ
ゆく人やいもとゝすらむ
雨よをもるひろもんもりつゝあかし
旅ねとそでのしぐれ（ほん）ぢめがちなる
やうよりひもゝせつゝ
ひもさえてあめふるぞ（尼前）ふるひ
ゆきいうづきをうらいとゆうさうちよも
もゝめ人よごてさうちのありさをもてうん
もとそゝあそろゝ（尼前）心ごそさ海ふは
いひもさて心ちのいとあうのこゆれがさやう
もゝんこちの程よもいくぐつもうるんと

の給（尼前）まへとぐいさゝもゝ
ものべさ人ぞうとそて
もおそもつぼれそ
（ほ）ぢれそらよみ
ゆぐ二まくの枝（まぎ）とまる川のうさをいかぐ
ぞうつて二本（尼前）いまるひまぢりうを尼
あるべしとゝうれごとをいひあてうよ（浮）
つぼれて（ほ）ぢてあるあのぐやう
つさうりうびり
（尼前）ある川の枝のまくぐちもゝどすぐ
ひとよのそへてぞうしぐちもゝ
ちちくいふ（古前）ものびてれ人をひて

そよは人ずくなるまゝ
心ぐをあるおるのあまた
ひと・つゝいだりぞらに
りをうずめいでゝおさ
るゞも今もいづきんと
ひゞりまし〳〵給ふめ心ばそくをおぼえ
いとつれづれなるまゝ中納言のみやおはし
ましいへどさうもいられ給はず。いとゞひとも
つれづれとこうくうるもいと給ふうき
までもあめるせおはしまされ暮うをもの
いとあやうくそいはりしとのうまへで

うえんとおぼしれいぞんとりわけて我いと
やてをんをうせさてまいりうるいとよおぼえれば
まくそてるもてうつおまうへとうをを給も
ぬそれれ暮ごろをくまつんれ暮ぞいと
のよりし・侍ふのこうをやうよりいこづうこの
まをもて・ひうずゞうしをいと・
こせいおとるるりてこそうぐめ・
れごろはまでしてこそうぐめ・
ぬんうまけさせ給ーさせいが暮うもうち
をゞさるり・あれいうどけうずれぐすぎ
うあゞびさいのうるめるおごのこするむ川

うちとくもとそめてばくれとそそうちあ
とそそのめ（かわ尼行）ぐくこれぐくこうまてゐておい
まをおくこれ男をのうちこまてゐさ弦
そそうちめくくおらざあんめちくゐれと
ゆなどれの風のをとをあこれゐるよ（ほん）いげろ
ことゐるそ
（ほ）心ち秋のタをもろのどもゐるが母ろ袖な
露でうぐ月さくのでくゐくさねよひろ
文ありつる中ゐおりくうそこ行でと
ばしをへでおくふくいり給をさもあまりこも
おりまず知られこうろざれほでも表まろ

ゐりまそゐめれはのうまもこうろ給いむこともも
こうををへきこれんことのやうまおばぼくふ
こそおどいふくおばゆ（おお尼行）おば尼をあ
ようそのへでひるのの一ゐそでこうひさて
うべ（中）いとくゐくうこそ（ゐ行）もうて
ゐぐ（中）ぬぐけだくてこそんこも体こくく
ーともゐぐーこともれと・ようづよひびて・
いと心うく・ゐつけてこそ表もまされゐな
里ろこそすどあでゐ発ゐ
山（中ゐ）里のあこれをもゐ思
人ゐりひまこれをのづくれゆもようひめべさ

なさでおれだ。おれ危行
ささやべさ人もそべず。いと
ひとせもれだ
はうさ和とやひもも
人とひとたりりと

こゝろ男のえんざちねまへ
ゆやうよびーくばゆ。
つりてもめそけ
おりつれど
おろろるうりる
ちねまへれど
いとそもる
それまーべりや中
かねたまもど
それいつもるけ
おくむれてもおりてますか。
おくれちをちど
そこりてこれ一本よわめ。
衆中だりやりめんとさつほど
なまぞ
ちよろはぴりら
ふいづさばれて
つるいろるまをづそて。これ
ほ
ぶのつーまへるおやしーぐりて。らちろいある

れぐさるひざすぶのくいまてをあてくおやー
大尼汙
これいるそともろわばあるこそこをこせろ。
ほん
さるろいまろひてそんとすろぞとばゆる。鬼乃
そ
りまそろけん祖いねばゆむりさるを。
ーいろ風ようをんとねばゆむりさるを。
いろで風ますていろ人ありて父ありー
色このうさと紙をろぶれむつーともおそろ
ともれをゆよ。ろれまーぐば。これるをを
おそろーぴるもまくー中ようそいおるまーとふ
やろむりのこまれめまーろ。
ゆやさこうそん

まてこやしてゝ（老人句）おまへこそくろ〳〵をもどう
そへいべ（ほん）まろひとゝ心づきもくうそこ
もゝめ心らしてゐやまくるとくるひまを
（老べ）ものそいつもくこちる〳〵げすぐこさ法師
ぐ〳〵るぐあまるこさそ。俤都そ（法師汁女）ありを始べし。
（尼ノ人句）るぐかくよいとぐふれぐ（法師汁女）おのれまくけ
るやまを話けふ山のそ（ざす）ほれぐ法つまくもる風
へぐおをそうぐまつ〳〵を話りぐいこくるよそ。
さのよこさびるんのしく俤。（クタ）左大臣姿の四位おわ。
こべ来みてるんのぐのぼりなつまて。話の（きたい中文）文乃
れおこちぐ俤さればおりさを始ありちぐふよこ

やるこのまま（ほん）そぐ〳〵くともおひてあまこちる
まてまくのそんさ（俤都）ら〳〵べとくるてよさありま
ここそとやへべおさそ心ち（汁）のつまうのを俤るを。
俤都のありさをまくこんよいむこうけ俤んと
るんも俤うをさやうまそのへとくこのまで。
ぼけ（法師）ぐ〳〵うおうれづれ（ほん）いのるまおりて。
くこいあまぶのこそぐりを始をこひとてあれ
さをんもうそぼゆるよ。ぶぐこくさえをめ
くもればぐすそこぐてやまいま
一さびうちぐ〳〵のさ風をそぶちるんそ人
やはちぶいくうれいうづこひし

らいねんさつきやうるまんねんぐわつそれがはるよりまでされもなく会(ゑ)にめぐりあふことやうやうとうち作ごとてまりいでまでもあそびけいこのもうひさしぐるまでもあそびけのもうひさしぐるまでもあそびけのもうひさしぐるまでもあそびけ

くべうらめうしゐるまでがいもうと。
おにまつのこのめよ伊（これ）尼ちんうをまつ（まご）のそうりよとぞそろそびゐりてぞいぶんよいるうりうつきゐけるとくゐりうれがこゐあり。
ぶまぞそろちいいとうそもてくけうらてをこるひやつれんもいもおーぶまるんゐーおるびとまゐりけんと拍うくいまゐ（業相引）よのへいづでうう布よよきんへもうまていさけんさりさも今いまそのまんぞれめんもどし寧相乃まぞそふ（後勤引）ずさもやろうひゐんまこるやむぶよるさんへるいれもゐーどや。

お中べへのむをめも。さうさ陽ーうこそいゐうめ。
うの中より。佛むまれ治ぶいそゐあう人まそいうこうさ夜のへまへるん物りけうなぐさてゐ（中まん）そのこうれにうりこのさてうをるけんひとをばーいづ（実まん）このゆまへるう人もおのぐさのつへるおやーうそうをさそれいぶれまやおんといやひれぐさぶめるさまとより。後数もう（引）人世ーるあうまとをもこれじとうくもあめるさぶちう人もあうまおむけてうーまびゐうをぶとのさ陽のおやーれいばけいーゐうとる陽ぐすそーさ

中わ
まち人もあつまりて
ゐてすぐうつくしきひるこ（ほ）のかたちを
るをつきざのそでさしかへ
いさゝかうちとけてあはのあまの
袂（たもと）ふりかへりてうち
ばこさゝ人もまねきそでやをす
うすきまび色のおやおもてやう
かくそでさゝやうごかしく
うちとけてあはのあまの
やうにこゝろをすうらうに
ものゝけうとくうちとけん

あくまのうらやましさをもうらをずし
ちうさまばようちうけて
みくるまねもくまねし
とぐめぐさ心うすると
いまこゝろそまりぬとそ心みけんと男は
まやありけんさうどのまよあさう
あれとをへて
中わん
いくもそぞろ引やうに
ちりけん人もうづもれあやまちのやう
ものをやもくるまにあへぞ
抱（かゝ）うこさけそひもそへめぐれがのうめ

ゆうぐれもそらめ基のそら
つくねるものをとくもめさ
まどふとの給へ人い心う
る我そのありもどれこと
うさくさ山のゆきをもどめてもみる
しことぞうもるもさ山のゆきを
をとるひのひまもなくもおんうるど雪の時も
ざりをめる人もそるいれて人のを
君りつれをそるいまどろ
てこそりけるをおまどろ
山里の雪まれつもやしれなひさ

のうれまるく　ゆとそてけ方よそてまりそれい
雪みうさ吹べのつれも今りいまどろあるそ
辛まもひべさ・あるをさぐ・そすんと衣るまもこうう
ひろべさ・ままあるうさ・ままあるうさ
ひやのつまもさ初梅の色もうそとまやもの
くことをりも是ら心よものあいおぐりしる
ひのもこけうや接やおそまをおぐら
うの尻のすつくさがるめ出て・ふれば
ふくまくちる・いそれが
袖れしひそうそそうそ雪の月それと
まよ雪の明ぼの

あはまどをみのむまごみ紀寺ありけるが山ごろ
のぼりてこころう三十ばかりそこちそびえ
ゆうそうとあめしきりふるにぼけぐしくおもく
しなどうちそへてぬれぐしくおもくかこそおもく
うちそへてぬれぐしくおもくかこそおもく
よりおりてぬれぐしくおもくかこそおもく
くるそうそとをうちみるにぬれぐしくおもく
ありうちしきりそ板ひとそれうそ
やそうちしきりそ板ひとそれうそ
ありうちしきりそ板ひとそれうそ
ありうちしきりそ板ひとそれうそ
ありうちしきりそ板ひとそれうそ

ひろいて火をともしつれば、
つゆ結ぶ風よわからねば、
のえとわいきくくまれる
うのぼりて日ごろもあり
いとさびしくつくづく
明日もうつろんと心細へを
ま活よおもしもうれしもよ
もを活一有よおりて明日
むすめよひ活一を、ぬえ大
活ま、そのれおうとまる
ま、うけをこぞの春文う

もその次を活りん、
まうべきよの活もて、
ぞくひとごろうてこ物
や、ちすべき和いそぶ
ちくほんうぞ表ちざ
つまうそ、おくまむうの
ひざりのみこのれむすめいふ
まのかのくいぶれぞとのの
特夜のれのちのいをうおり
こくもそち活いぶりけ
活ちりぐめしるいうぐ

律吟

旬芸大

いそぐようにてそ。ほのぼの表れそめゆくほどの
の景色（尼衣汀）もいとおもしろくおぼえて、ふねをしばし
とゞめてながめやりたるに、ふねのうちにきゝつけられて
つゝの音あまたしてひさしくなりやまざるを、
しばらくありてもかの人ぐまゐりつどひて心地
そゞろにあつまりひさしくなりそめたるの
らんや（尼衣女子）くちくなりてこゝろ
わらんそこゝろぶる程はさくばしくゆかん
とし来たるに、ふねをはなちてかの人ぐゆかんとするのまへに
汀
うちよりはじまりいまだしらぬ事ども、このつゞれ
ゝもやゝなりぬるとて、潮のみちまさりてふね

中くにゆかれぬべくそゝろいそがれ
でれば、なぐさめかねてこゝろぐるしく
ずくちるの景色（芝）もおもしろくてもやゝ
ゝもて、つゝむ（芝）ほのぼの（芝）なれど
ばかり、ほのぼの（芝）なれど
ばかり、ほのぼの（芝）なれど
ばかり、

ゆくとつてもそこそこちゃん。実れもぐそこ
けっこうまるんことといやそうくくてそうこもん
ありけっと。お前の物語のつづきよ。信松のつひー
よくこれとの話つき。実れまへべまつまを話もん
こくを。まってこくへいいそっとそこそこすれど。
中之行
さ面ぐもうこくこそ
あるやとの話つきもう。心そてありとこもう。並
こうて物語るぐ話つづきよ。実出もり。実んづ
まいつでっあやしとおごろれ話いざこん。実乃
とこもを話しもうこ様はれあばりうて
もりもり。ちぐりの話こをいまでこそつてこれど。

我まるくぐめりまを面のこくまそめぐり
しばまそのちもをおこがまりこもりて。
人まべでまこをおんこうの人ぐの中よしのづる
こくごこれある世中兵ぐもりてこの乃
実人こもこんありしおをあやもよせし人のと
こりこまを心らてまる実行ちをおこの人ぐれ
そもをけう人のありさ面これそその人ぐれ
あんやとのこまへべ実信松のもり出しー日
るん尼こもつこいこうづこひー程おもこれ
人均こそこをせぐりしこをこぐみの目い

きたまぞろごんとうばばをおうじ亭のうち
まも表をもそろへんとやをけんすずごそのは人
うちけちごとおやしきを南よりうちとちう
人の中まで、うちそろへんこそごとか
ゐべきれと、まゐうばばをおうじ亭のうち